

いじめを克服する効果的な方法

—ミュージカル教育によって—

竹 田 敏 彦

Effective Ways to Overcome Bullying:
Through Musical Education

Toshihiko TAKEDA

要 旨

いじめを克服するためには、いじめの傍観者を仲裁者に変える教育が不可欠であり、チーム学校としてのいじめ防止の取組が重要である。本研究は、いじめ防止の教育的視点を、傍観者を仲裁者に変えることに置き、その実現のための教育方法をミュージカル教育（総合的な学習の時間を要する教科等横断的・総合的な学習の取組）に求めて、「いじめの克服」を追究したものである。その成果は、小学校6年生の時に学級崩壊を経験した児童が、中学校1年生で取り組んだミュージカル教育を通して、個人及び集団として大きく成長した姿——生徒同士及び教職員、保護者、地域の皆様との交流を通して絆を深め、共感的な人間関係や自己存在感を高めることに成功した結果——に見られた。

キーワード：ミュージカル教育、いじめの四層構造、いじめの傍観者を仲裁者に変える教育、チーム学校

1 はじめに

いじめ研究の先進的な取組は、フィンランドのKiVaプログラム¹⁾に見られるように、「傍観者を仲裁者に変える」ことにある。

いじめ問題の解決のためには、ピアプレッシャー（同調圧力）に敏感な傍観者層の広がりやを何としてでも阻止しなければならない。彼らの対人不安と緊張を和らげ、集団から逃避するような安直な行動を取るこ

とをさせないような教育活動が必要である。そのためには、個々の児童生徒の勇気や正義感のみに頼るのではなく、不正に立ち向かう集団としての力を結集するべく、加害者や観衆を上回る数的に有利な擁護者や仲裁者となっていく傍観者の環境を整えることが求められる。

すなわち、いじめの傍観者を仲裁者に変える教科等横断的・総合的な学習が不可欠である。具体的には、傍観者を仲裁者に変えることが可能になる各教科等（各教科、特別活動、総合的な学習の時間、道徳科）の関連による授業改善や生徒指導の三機能を生かした教育の工夫・改善が求められる。そのことを理論と実践の両面から追究することが本研究の主旨である。

2 研究の目的

本研究の目的は、いじめを克服する視点を「傍観者を仲裁者に変える」ことに置き、その方法として、チーム学校として取り組んだ「ミュージカル教育」の実際とその意義、教育的効果について提示することである。具体的には、総合的な学習の時間を要する教科等横断的・総合的な取組としてのミュージカル教育が、いじめ克服にとっていかなる意義と成果があったのかを理論と実践を通して明らかにすることである。

3 研究の方法

本研究の目的を達成するための方法は次のとおりである。

- ①いじめの四層構造を明らかにし、いじめの今日の実態及び文献研究の成果から、傍観者を仲裁者に変える視点の重要性を指摘する。
- ②いじめを克服する視点を、傍観者を仲裁者に変えることに置き、その方法としてミュージカル教育の実際について取り上げ、チーム学校としての取

組の重要性について提示する。

- ③いじめの傍観者を仲裁者に変えるためのミュージカル教育の成果と課題を明らかにする。

4 研究の内容

(1) いじめの実態

- ①いじめの認知（発生）件数の推移（国公私立）から
文部科学省が2021（令和3）年10月13日に発表した「いじめの認知（発生）件数の推移（国公私立）」を基に作成したものが図1である²⁾。

2013（平成25）年度以降（令和1年まで）の小学校のいじめの認知（発生）件数が大幅に右肩上がりになっているのが目を引く。それは、2013（平成25）年9月施行のいじめ防止対策推進法第2条（いじめの定義）の成果（「心理的又は物理的な影響」を与える行為。「心身の苦痛」を感じているもの。）であり、いじめを認知しやすい定義といえる。

2019（令和1）年度から2020（令和2）年度においていじめの認知（発生）件数が減少に転じているのは、いじめが前年度に比べて相対的に減少したことを意味するものではない。2019（令和1）年度調査結果から2020（令和2）年度調査結果の減少傾向は新型コロナウイルスによる学校閉鎖（休校）の影響によるものと考えられる。

②学年別いじめの認知件数（国公私立）から

文部科学省が2021（令和3）年10月13日に発表した「学年別いじめの認知件数（国公私立）」が図2である³⁾。2020（令和2）年度の調査結果から、小1～小6が中1を上回ったことがわかる。

同じ学区の複数の小学校から中学校に進学する生徒は、慣れ親しんだ小学校から一転して不安の多い中学校生活を余儀なくされる。それだけに、いじめ問題も多々あったことが想定される。ところが、ここ数年間において、中学校のいじめ認知（発生）件数を小学校の全学年が上回ったことから、小学校のいじめ認知（発生）件数がいかにスピードアップして増大したかがわかる。いじめ認知（発生）件数が増えることは決して悪いことではない。小さいいじめも取り上げられ、問題解決のテーブルに置かれるからである。問題なのは、いじめの認知（発生）件数が増えただけで、いじめが未解決のままになっていることである。

③いじめの四層構造から

いじめの四層構造については、森田（1986）ら⁴⁾によって定義されている。いじめる児童生徒（加害者）、観衆（はやしたてたり、おもしろがったりして見ている児童生徒）、傍観者（見て見ない振りをする児童生徒）、いじめられる児童生徒（被害者）がそれぞれにあたる。いじめの持続や拡大には、いじめる児童生徒といじめられる児童生徒以外の「観衆」や「傍観者」の立場にいる児童生徒が大きく影響している。「観衆」はいじめを積極的に是認し、「傍観者」はいじめを暗黙的に支持し、いじめを促進する役割を担っている。

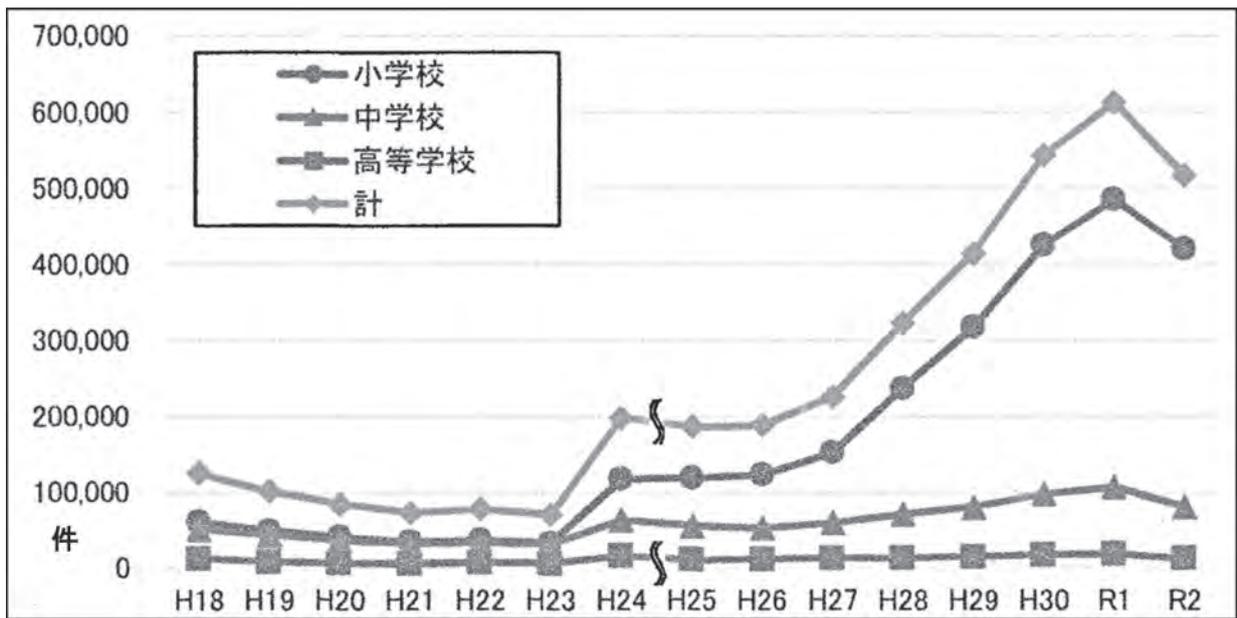


図1 いじめの認知（発生）件数の推移（国公私立）

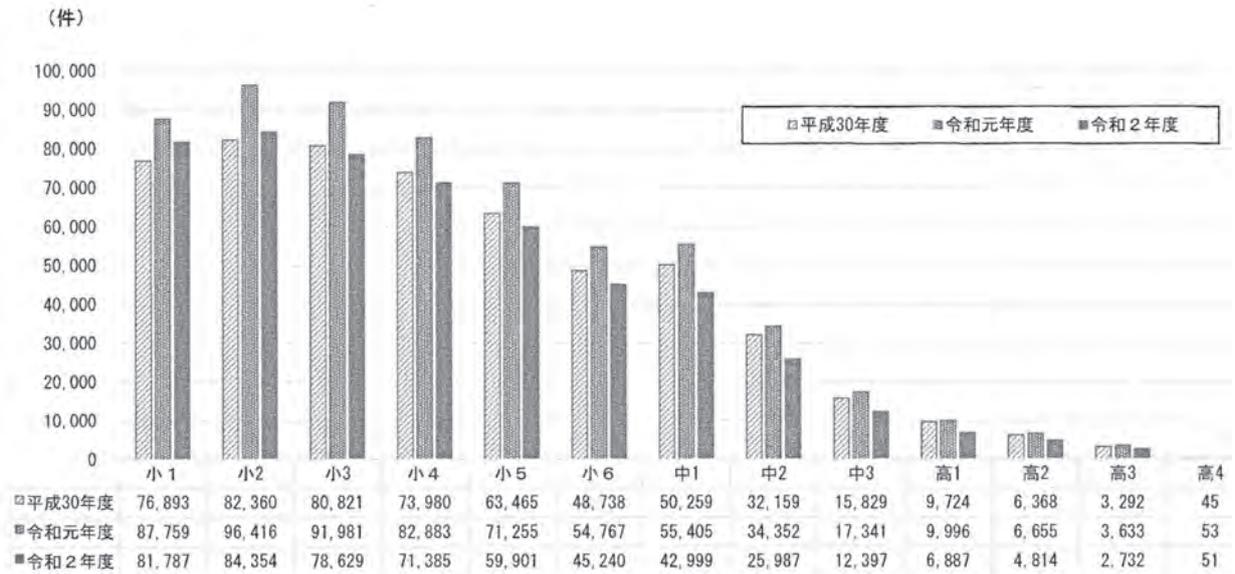


図2 学年別いじめの認知件数（国公立）

図3（いじめの四層構造）は、池島（2007）がいじめの構造をわかりやすく概略図化⁵⁾したものである。ピアプレッシャーに敏感な「傍観者」が拡大傾向にあることがよくわかる。ここに、組織的な取組、チーム学校としての取組が不可欠といえる。

(2) いじめの傍観者を仲裁者に変えるミュージカル教育

①チーム学校としてのいじめ防止の取組の重要性

いじめの傍観者を仲裁者に変えるためには、チーム学校としてのいじめ防止の取組が重要である。図4を参照されたい。教職員のみならず、SC・SSW・専門スタッフとの連携・分担や、家庭及び地域との連携・協働である。

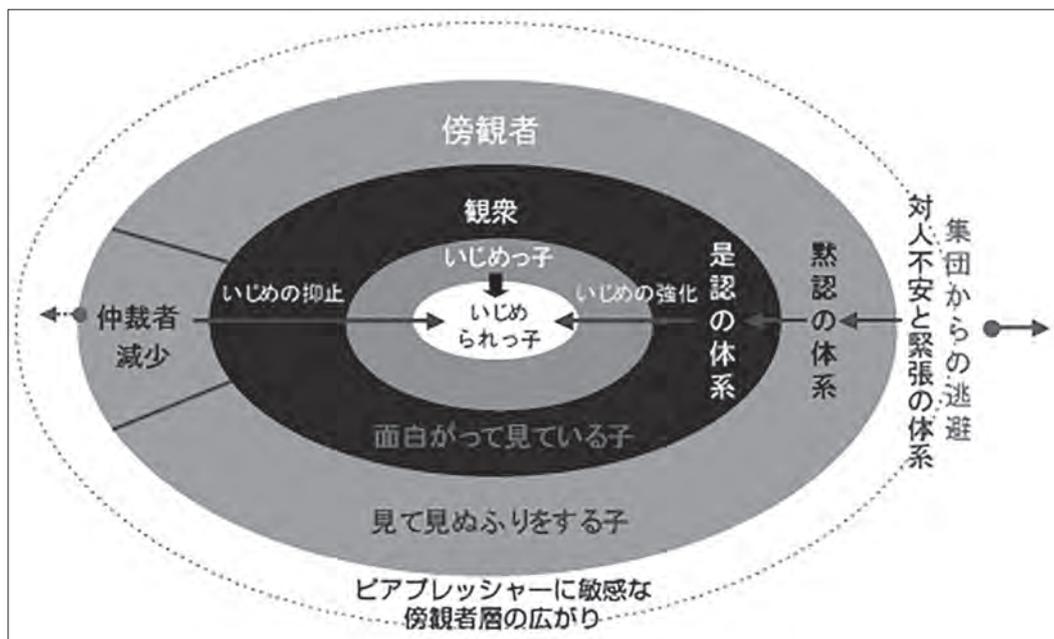


図3 いじめの四層構造

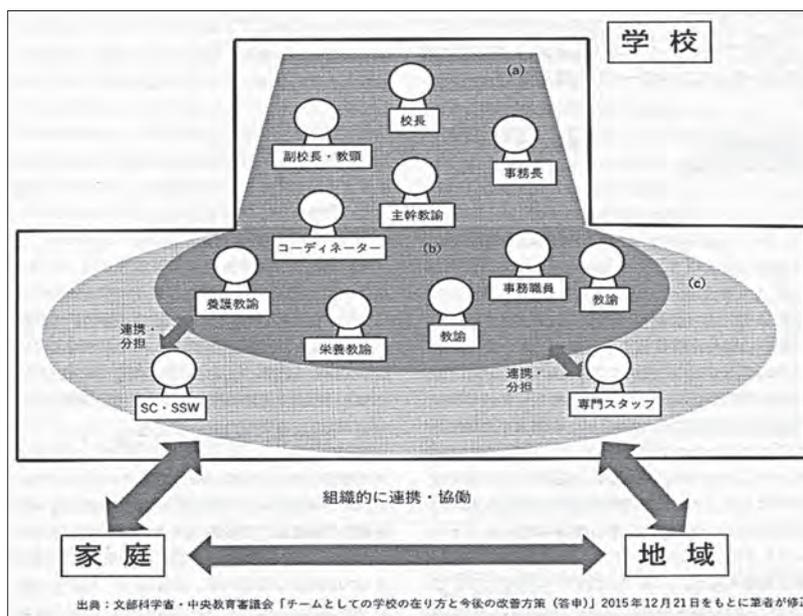


図4「チーム学校」としての連携

その方略の一つが、「総合的な学習の時間で取り組むミュージカル教育」である。当時、公立中学校校長であった筆者は、総合的な学習の時間で取り組んだミュージカル創作活動と各教科、道徳科、特別活動の関連を意図した「ミュージカル教育」を通して、校訓にいう「響き合う」ことを追究した。この取組のカリキュラムの位置付けは、総合的な学習の時間を要とする各教科等間の関連にあり、教科等横断的・総合的な学習を展開することにある。次に示すものはその当時の「ミュージカル創作の記録」⁶⁾である。

今日、教育を語るとき、「絆」は欠かせないキーワードとなっている。平成23年3月11日、記憶に止め今後に生かすべき東日本大震災の教訓、人や地域の絆をよりどころとする被災地発の教育モデルは全ての学校、地域において共有されなければならない。

この論説は、中国新聞社論説委員の石丸賢氏が、筆者が校長として勤務していた広島県三原市立第二中学校の創作ミュージカル取材し、2011年（平成23年）9月4日付の朝刊（p.24「解説・評論」）に掲載された「無縁化するコミュニティー、子どもの心をつかみあぐねる学校や家庭〔中略〕。すさむ現実には、誰もが焦る。」ことに結ばれている。

石丸氏の論説は続く。「総合芸術の一つに数えられるミュージカル。芝居に歌、ダンスで舞台を盛り上げる。照明や効果音、道具作りに加えて宣伝のチラシ作りなど、どの生徒にも『一人一役』の出番と責任を用

意する。連帯感を醸すための種まきのだろう。」「演技手は地域からも募っている。昨年の公演に感激し、ことしはPTA会長や民生児童委員も出演する。名前さえ知らなかった生徒と待ち時間におしゃべりが弾む住民たち。『地域で出会えばつい笑顔になる』と互いに感想が出るのは、心の糸がつながりだした証にみえる。」「脚本と配役、音楽にステージ。すべてがそろったとき、ミュージカルの幕は開く。その舞台をコミュニティーに、配役を住民に置き換えて考えられないか、と思う。」「含蓄に富むミュージカル教育の手法は、地域づくりにも十分応用できそうな気がする。」

この石丸氏の論説は、筆者が校長として主宰したミュージカルを、「絆を生む舞台の一体感」と題し、ミュージカル教育として紹介されたものである。筆者の思いを的確に表現してくれている。

②教科等横断的・総合的な学習の構想

教科等横断的・総合的な学習とは、総合的な学習の時間を要した各教科等（各教科・特別活動・道徳科など）の有機的な関連を意図した、カリキュラム・マネジメントによる教育活動である。次の図5が、いじめの傍観者を仲裁者に変える教育を展開する構想⁷⁾である。教科等横断的・総合的な学習の要となる総合的な学習の時間の前後において有機的な関連を図る各教科等（各教科・特別活動・道徳科など。図5のA・B・C・D・E・F）のコラボレーションは、相互尊重の学びから始まり、対話の成立、ピアプレッシャー（同調圧力）の排除へと学びを深めることによって、いじ

めのメカニズムを理解し、いじめの傍観者を仲裁者に変えることになる。

この構想は、チーム学校として推進するいじめ防止対策の一方法を描いているといっても過言ではない。この取組から、成果を上げているフィンランドのKiVaプログラムの内のKiVaレッスンやKiVaチームに匹敵するかそれ以上のことが期待できる。なぜなら、教科等横断的・総合的な学習は、学級担任や教科担任が単独で行う学習形態ではなく、各教科、特別活動、総合的な学習の時間、道徳科を有機的に関連させることから、校内外の人材、施設・設備等を活用するなど、学校と家庭・地域の連携が重視される学習形態だからである。

教科等横断的・総合的な学習は、児童間・生徒間の交流のみならず、児童生徒と教職員、保護者、地域の皆様、専門機関のスタッフとの交流を通して学ぶ機会が格段に増えることになる。そのことは児童生徒のもの見方や考え方、道徳的価値の理解を深化させることとなり、いじめを未然に防ぐ力、とりわけ傍観者を仲裁者に変える力となる。その秘訣は、開かれた教育課程の下、児童生徒が大人との交流によって獲得する

絆・誇り・郷土愛・人間愛にある。

図5にある「体験の経験化」とは、体験の意味・意義を知的に理解し、認識することである。ミュージカルの「体験」はミュージカル教育を通して「経験」となる。教育活動は単なる「体験」に止まるのではなく、「体験の経験化」によって確かなものとなる。

③教科等横断的・総合的な学習の構想—ミュージカル教育の実際

筆者が校長として取り組んできたミュージカル教育は、広島県東広島市立高美が丘中学校で3年間、広島県三原市立第二中学校で4年間の計7年間に渡った。高美が丘中学校では、新興住宅街であるが故に、地域の文化や人間関係の希薄さを克服するための「絆」を、三原市立第二中学校では、駅近であり街中にある学校の宿命ともいえる生徒指導上の諸問題を克服するための「絆」をテーマとして掲げ、その効果的な方法として、ミュージカル教育を展開した。両校の取組の共通点は、プロの脚本家・演出家の指導の下、生徒と教職員、保護者、地域の皆様が一体となってミュージカルを創作したことに見られる。

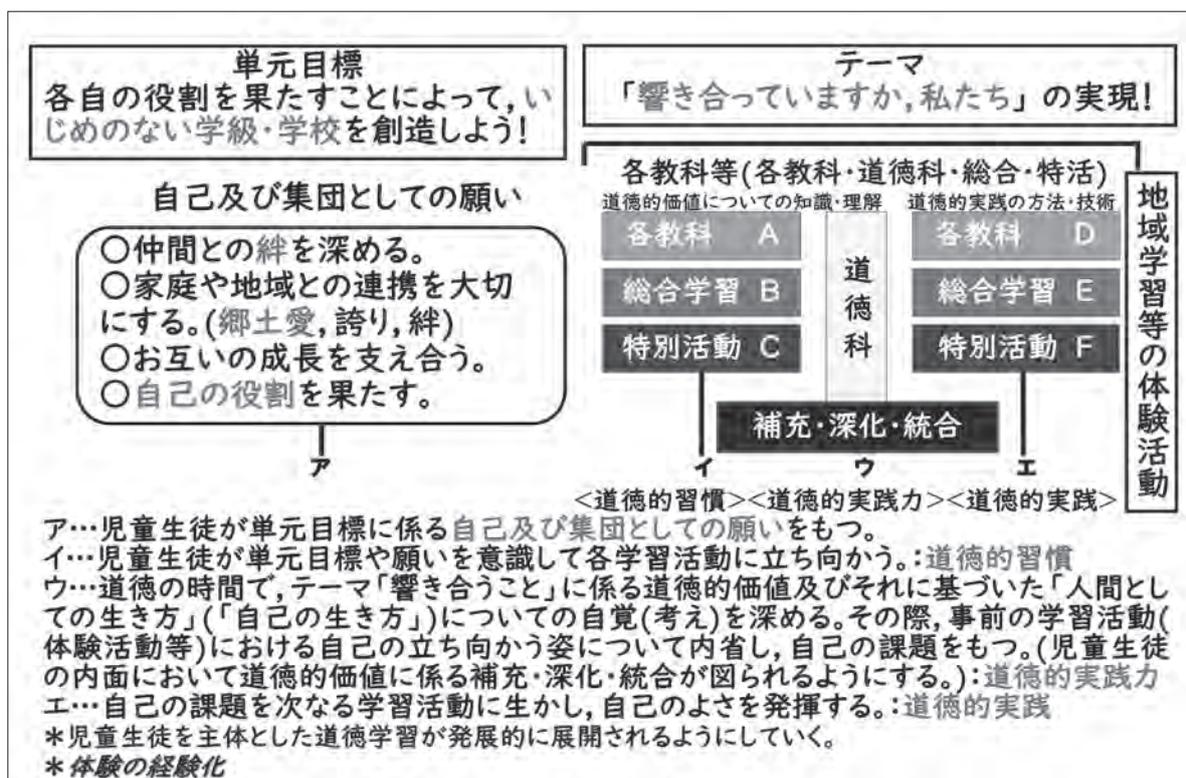


図5 教科等横断的・総合的な学習の構想



図6 ミュージカル教育の実際

図6は、三原市立第二中学校のミュージカル教育を、日本教育新聞社が取材の上、2011年8月1日・8日版として掲載したものである。筆者は、校訓「響き合う二中っ子」と、学校教育目標「知・徳・体のバランスの取れた人間力の向上」を具現化する方法として、ミュージカル教育を推進した。三原市の伝統文化である「三原やっさ」を題材にしたミュージカル「響き合う『やっさ』の青春」である。地元の中学校1年生と東京からの転校生（理恵）が、小早川隆景による三原城の築城までの「民話」に興味・関心を抱き、仲間や大人との関わりを通して、「三原やっさ」の担い手として成長していく物語である。

(3) ミュージカル教育の成果

ミュージカル教育の成果は、図6やミュージカルの実際（図7、図8、図9、図10、図11、図12）、ミュージカルを観賞した市民の声（図13）、ミュージカルを演じた生徒の声（図14）からも窺うことができる。生徒と教職員、保護者、地域の皆様が一体となってミュージカルの完成を目指す姿には心打たれるものがあった。生徒はプロの脚本家・演出家・音楽家や、保護者・地域の皆様からなる大人のキャスト、仲間（キャスト・スタッフ）との関わりから著しく成長した。具体的には、キャストや舞台裏のスタッフが全体を意

識することで自らの立ち位置を認識し、ケア（「思いやり」と「責任」）の倫理を働かせて行動に結び付けたこと、キャストが次第に役柄に自己移入（エンパシー：empathy）することができるようになったこと、スタッフが舞台裏で献身的に大道具・小道具の出し入れや音響、場面転換、合唱等に関わったこと、キャストが舞台裏のスタッフの「僕たちはキャストがステージで輝くことを願って頑張っている。」との言葉を聞いてギアを入れ直したことなどである。

ブライアン・ウエイ（1977）⁸⁾は演劇とドラマの違いを、「『演劇』は主として、俳優と観客の間のコミュニケーションである。『ドラマ』は観ている人とのコミュニケーションは一切問題にせず、一人の参加者の経験である。」と説明している。また、「観ている人とのコミュニケーションを児童や若人に求めるのは無理な話である。」とも述べている。

このことから、筆者は学校教育として取り組むミュージカルを「演劇的ドラマ」と捉えてきた。ミュージカル教育の成果を約800名の市民の前で披露することにおいては、「演劇」の要素が大切にされなければならない。しかし、学校教育として行うミュージカルは参加費を徴収する興行ではない。そうであるなら、「ドラマ」の要素があってもよいのではないか。ミュージカルの練習が次第に高まる中でもプラトー現象が

現れる。その時、校長であった筆者は、いつもの決まり文句を伝える。「あなたたちは誰のためにミュージカルをやっているのですか。学校や先生にやらされているというのであれば、即刻辞めたほうがいい。ミュージカルをあなたたちのためにやりなさい。」と。この言葉を聞くことによって、生徒の創作意欲は一段と上がる。そして、本番で見事なミュージカルをやったのけた。頼もしい生徒たちである。

ブライアン・ウエイ（1977）は、また、「芸術教育は感性を発達させることに関わっている。それは知能と同じに大切なもので、知的な天賦の才を持つ者にとっても、持たない者にとっても、人生を豊かにするための基本となる部分である。しかし、感性と言えども、知能と同じに訓練が必要である。」と述べている。⁹⁾

ミュージカル教育は芸術教育であり、感性の発達を狙った重要な教育である。いじめを許さない感性を豊かにするためには、ミュージカル教育を通して「絆」「思いやり」「責任」を感じさせ、校訓の「響き合う二中っ子」を追究することが効果的である。

その成果は、人間関係が豊かになったことに見られ

る。生徒同士、生徒と脚本家・演出家・声楽家、教職員・保護者・地域の皆様、市民との「絆」である。近い将来に向けて、地域の伝統文化の担い手として活躍するきっかけづくりができたことも大きい。

ミュージカル教育は学校・家庭・地域社会が一体となって取り組む「チーム学校」として、「いじめ防止対策」として効果的な取組であった。その根拠は、小学校6年生の時に学級崩壊を経験した児童が、中学校1年生で取り組んだミュージカル教育を通して個人及び集団として大きく成長した姿に見られた。それは、ミュージカル教育が、生徒同士及び演出家や教職員、保護者、地域の皆様等の大人との交流を通して絆を深め、個性を伸ばし、集団の質を大きく高めることに成功した結果である。「演劇的ドラマ」としてのミュージカルが、「絆」を深めることによって、いじめを許さない感性を発達させたのである。

また、ミュージカル教育の経験者である卒業生が、やがて教員となって筆者に涙ながらに語ってくれたミュージカルの教育的意義及び効果に関する言葉は、まさに宝物である。



図7 裕太と父の葛藤



図8 秀爺から「民話」を聞く生徒



図9 里の者たちを守る小早川隆景



図10 結束を誓う動物たち



図11 エピローグ「三原やっさ」



図12 観客の前で踊るキャストたち

2012年(平成24年)11月 中国新聞

生徒の創作劇に拍手

主婦 大森 直子 70歳
三原市芸術文化センター
「ボボロ」へ、中学生のミ
ュージカル「響き合う『や
っさ』の青春 Part III
栄光のトロフィー」を見
に行った。この中学校では
4年前から、創作に取り組
んでいるという。

総合的な学習の時間の一
環で、1年生全員と2、3
年生の有志、教職員、保護
者、地域の人たちが協力し
ている。

演出と合唱指導は専門の
方だが、キャスト、合唱か
ら照明、小道具、衣装まで
生徒が全てやっているとい
うことで驚いた。拍手を送
りたい。

三原市の伝統文化である
「三原やっさ」の由来と民
話を基に創作し、友情や絆
を深める物語となってい
た。4月から練習に取り組
み、勉強やクラブ活動もあ
つて並大抵ではなかっただ
ろう。

せりふも多く、ミュージ
カルになじみがない私でも
よみ分り、楽しく見させ
ていただいた。この創作ミ
ュージカルのように、仲間
や地域の人たちとの絆の輪
が広がることを、願ってや
まない。
(三原市)

図13 ミュージカルを観賞された市民の声

二〇一二年(平成二十四)年十二月 中国新聞

創作ミュージカル

三原市立第二中1年
草本 涼 記者

「いろんな人に変え
られているんだ」と感
じた。ミュージカル創
作学習でした。総合的
な学習の時間で取り組
んできました。

僕たち1年生149
人は、毎週1回の練習
を1月から半年間、大
人のキャストの皆さん
に励まされてきたま
が頑張ってきたまし
た。演出家の林先生や
二中の先生方の指導の
下、キャストから音
響、照明、メークや
衣装まで、すべてをこ
なしてきました。

そして、11月10日の

創作ミュージカル
ホボロ(三原市芸術文
化センター)公演を迎
えました。僕たちキャ
ストとスタッフの心が
一つになって、無事に
ミュージカルを創り上
げることができまし
た。生演奏してくれ
た吹奏楽部の先輩にも
心から感謝していま
す。

この経験を通して、
校訓「響き合う二中っ
子」や「三原やっさ」
をすこく誇りに感じる
よみになりました。重
重な体験をこれからの
生活に生かしていきたい
と思います。

「三原やっさ」をテーマ
にした創作ミュージカル
を公演しました

図14 ミュージカルを演じた生徒の声

5 おわりに

いじめがなくならないのは、被害者を取り巻く加害者、観衆、傍観者のいじめの四層構造のうち圧倒的多数を占める傍観者が、被害者に寄り添ったり、加害者や観衆から被害者を守ったりすることができないからである。傍観者が加害者や観衆にプレッシャーを与えることができない限りいじめを克服することはできない。児童生徒の「いじめを許さない」とする結束の輪、集団の力が必要不可欠なのである。そのためには教育の力が必要である。総合的な学習の時間を要とする教科等横断的・総合的な学習（各教科、特別活動、総合的な学習の時間、道徳科の関連）によるカリキュラム・マネジメントが喫緊の課題である。本研究は、この課題解決に向けて、ミュージカル教育を通してその理論と実践の両面からアプローチしてきた。その成果は多大であったが、さらなる工夫・改善が必要である。引き続き研究を深めていきたい。

参考文献

- 竹田敏彦〔監修・編〕(2022)『教育課程(カリキュラム)編成はこうすればよい——社会に開かれた教育課程の実現——』ミネルヴァ書房
 竹田敏彦〔監修・編〕(2021)『グローバル化に対応した新教職論——児童生徒にふさわしい教師・学校とは——』ナカニシヤ出版

[2022. 10. 6 受理]

コントリビューター：船津 守久 教授
 (現代心理学科)

註(引用文献)

1. 竹田敏彦〔監修・編〕(2020)『いじめはなぜなくならないのか』ナカニシヤ出版 pp.103-106、戸田有一(2013)「欧州の予防教育」山崎勝之・戸田有一・渡辺弥生〔編〕『世界の学校予防教育』金子書房 pp.168-181
2. 文部科学省(2021.10.13)「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査結果」による。
3. 上掲書2と同様
4. 森田洋司、清永賢二(1994)『いじめ 教室の病』金子書房 pp.48-50
5. 池島徳大〔監修〕(2007)「いじめ問題解決への教育的支援」『奈良教育大学いじめ問題プロジェクト(代表：重松敬一)』
6. 竹田敏彦〔監修・編〕(2020)『いじめはなぜなくならないのか』ナカニシヤ出版 pp.114-115、竹田敏彦(2022)「いじめの傍観者を仲裁者に変える道徳教育の方法—道徳科を要として—」安田女子大学紀要No.50 p.135
7. 竹田敏彦〔監修・編〕(2020)『いじめはなぜなくならないのか』ナカニシヤ出版 p.107 一部修正加筆、竹田敏彦(2022)「いじめの傍観者を仲裁者に変える道徳教育の方法—道徳科を要として—」安田女子大学紀要No.50 p.134 一部修正加筆
8. プライアン・ウエイ〔著〕、岡田陽/高橋美智〔訳〕(1977)『ドラマによる表現教育』玉川大学出版部 p.14
9. プライアン・ウエイ〔著〕、岡田陽/高橋美智〔訳〕(1977)『ドラマによる表現教育』玉川大学出版部 p.16

